

# 水景とシークエンスの関連性とその設計手法についての研究 —谷口吉生の展示機能をもつ作品を対象として—

指導教員 加茂 紀和子 教授

桜田 裕斗

## 【1】研究背景と目的

『水』は空間を豊かにする要素として、多くの建築の中で重要な役割を担ってきた。中でも、谷口吉生(1937-)は建築空間に水景<sup>注1</sup>を取り入れた作品を数多く手がけており、その景観美が高く評価されている。また、それらは展示機能をもつことが多く、来訪者は人工水盤やカスケード、海の借景などの様々な水景と共に展示空間を巡ることができる(図1)。

本研究では、展示機能に沿うシークエンス中<sup>注2</sup>に水景が大きく関連していることを考え、その分析により谷口の設計手法にある可能性を明らかにする。

## 【2】研究概要

研究対象として、2018年までに竣工された谷口吉生設計の展示機能をもつ全12件の外部隣接空間<sup>注3</sup>と内部空間における図面と言説資料を元に建築構成を類型化する(表1)。次に、12件のうち国内9件<sup>注4</sup>の現地調査としてシークエンス写真を撮影し、ノーテーション<sup>注5</sup>の作成を行う。その結果から、水景とシークエンスの関連性とその設計手法について考察する。

## 【3】建築構成の抽出・分類

1) 建物と水景の配置構成 水景の〔種類〕〔個数〕に注目し、各対象作品における配置構成要素を抽出する(図2)。その結果、外構に人工水景<sup>注6</sup>が一ヶ所存在しているものを(単一型)、外構に人工水景が複数存在し、それらが点在しているものを(散布型)、周辺に海などの自然水景が存在しているものを(借景型)、人工水景と自然水景の両方が存在しているものを(複合型)の4つに分類できた(表2)。

2) 言説から探る水景の設計意図 次に、文献資料<sup>注7</sup>から各対象作品における水景と空間構成の関係を表す記述を抽出する(図3)。その結果、水景を閉鎖的な展示空間に強く対比させ、開放的なシーンとして位置づける言語をもつ《対峙型》、展示空間と繋げるためのシーンとして位置づける言語をもつ《繋がり型》、展示鑑賞後の余韻に浸るシーンとして位置づける言語をもつ《余韻型》の3つに分類できた(図4)。また、対象言説のないものは3作品見られた。抽出言語の関係から《余韻型》《対峙型》と《余韻型》《繋がり型》を合せもつ作品は見られるが、《対峙型》《繋がり型》は共存関係にないことがわかった(図5)。

## 【4】水景のノーテーション

1) 分析方法 ①対象作品9件の展示動線を想定し、5mごと<sup>注8</sup>に撮影箇所をプロットした図面を作成する

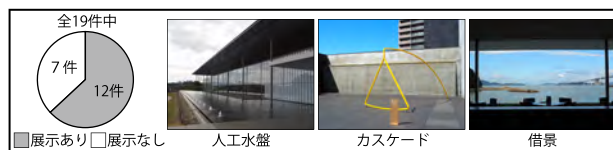


図1 水景をもつ谷口作品における展示有無の割合と水景例

表1 対象作品一覧

No.	作品名	竣工年	所在地	分析対象	
				言説配置	ノーテーション
1	土門拳記念館	1983	山形県酒田市	○	○
2	東京都葛西臨海水族園	1989	東京都江戸川区	○	○
3	長野県信濃美術館・東山魁夷館	1990	長野県長野市	○	○
4	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	1991	香川県丸亀市	○	○
5	豊田市美術館	1995	愛知県豊田市	○	○
6	葛西臨海公園展望広場レストハウス	1995	東京都江戸川区	○	○
7	東京国立博物館 法隆寺宝物館	1999	東京都台東区	○	○
8	広島市環境局中工場	2004	広島市中区	○	○
9	香川県立東山魁夷せとうち美術館	2004	香川県坂出市	○	○
10	ニューヨーク近代美術館 新館	2004	ニューヨーク	○	○
11	鈴木大拙館	2011	石川県金沢市	○	○
12	京都国立博物館 平成知新館	2014	京都市東山区	○	○

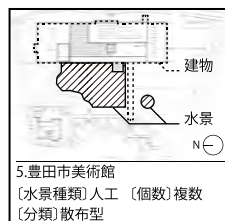


表2 配置構成の類型分類

種類	人工		自然		人工+自然	
	一ヶ所	複数	一ヶ所	複数	一ヶ所	複数
模式図						
名称	〈単一型〉	〈散布型〉	〈借景型〉	〈複合型〉		
作品No.	1,3,7,10,11	4,5,12	6,8,9	2		

図2 配置構成の抽出例

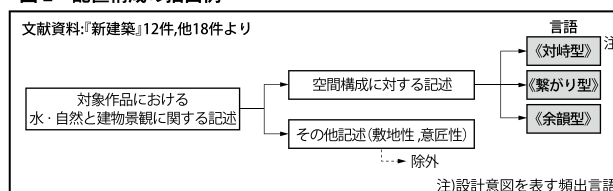


図3 言説の抽出方法

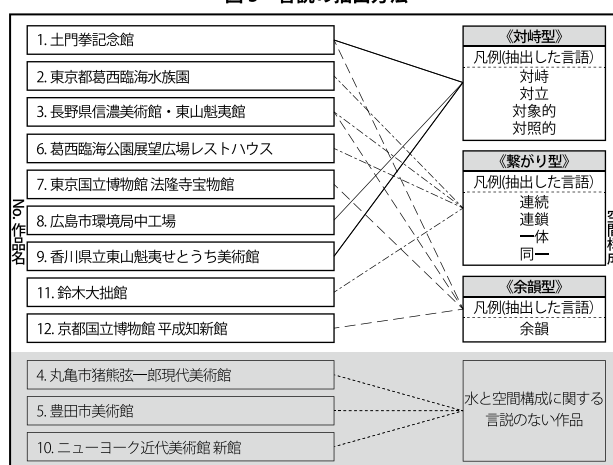


図4 作品別空間構成の類型分類

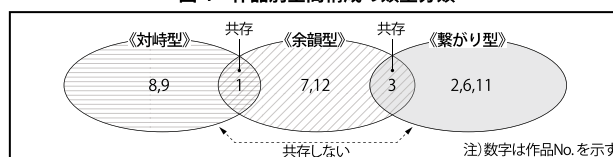


図5 抽出言語の関係

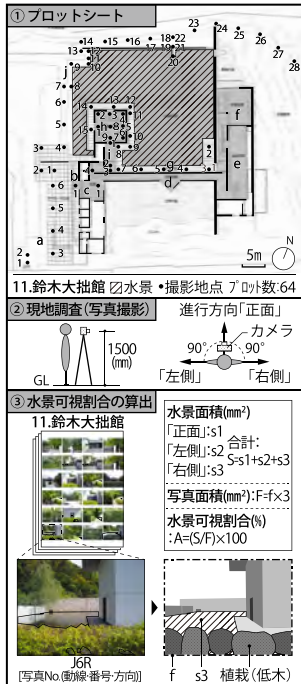


図6 シークエンス写真の分析例  
表3 水景種類と空間構成要素

水景	人工水盤	かたど	海
模式図			
要素	開口	手摺	植栽
詳細	枠	格子	低木 高木
模式図			

表4 展示動線中の方向転換回数

作品No.	1	2	4	6	7	8	9	11	12	平均
多シ	12	20	24						31	22
シ					13					6
少		5				7	16			9

注) 平均値は小数点以下四捨五入

(図6)。②現地調査で、それらの各撮影箇所において進行方向対し「正面」「左側」「右側」の写真撮影を行う<sup>注9)</sup>。③ ②より得た写真から、水景可視割合を算出する。④ ③より得た割合、水景の種類とその可視範囲に影響を与える空間構成要素(表3)を表記したノーテーションを作成する(図7)。

2)分析結果 水景可視割合における振幅の大きい箇所が、シークエンス全体に亘り見られるものを[点在型]、シークエンスの最初と最後に見られるものを[前後型]、シークエンスの最後に見られるものを[終盤型]の3つに分類できた(図7)。次に、水景可視割合と空間構成要素の関係から i. 水景を隠し振幅に抑揚をつける高木、ii. 角度により水景の見せ方が変化し振幅にゆらぎをもたせる格子の開口と手摺、iii. 水景と様々な空間構成要素を混在させた修景を眺望できるベンチの存在が見られた。また、展示動線中の方向転換回数は[点在型]において多く見られた(表4)。

### 【5】水景とシークエンスに関する考察

配置構成とシークエンスの関係を見ると、シークエンスのタイプは配置構成のタイプによらず現れている(図8)。このことから、谷口は与条件を捉えながら多様な配置計画を行うことで、意図するシークエンスを

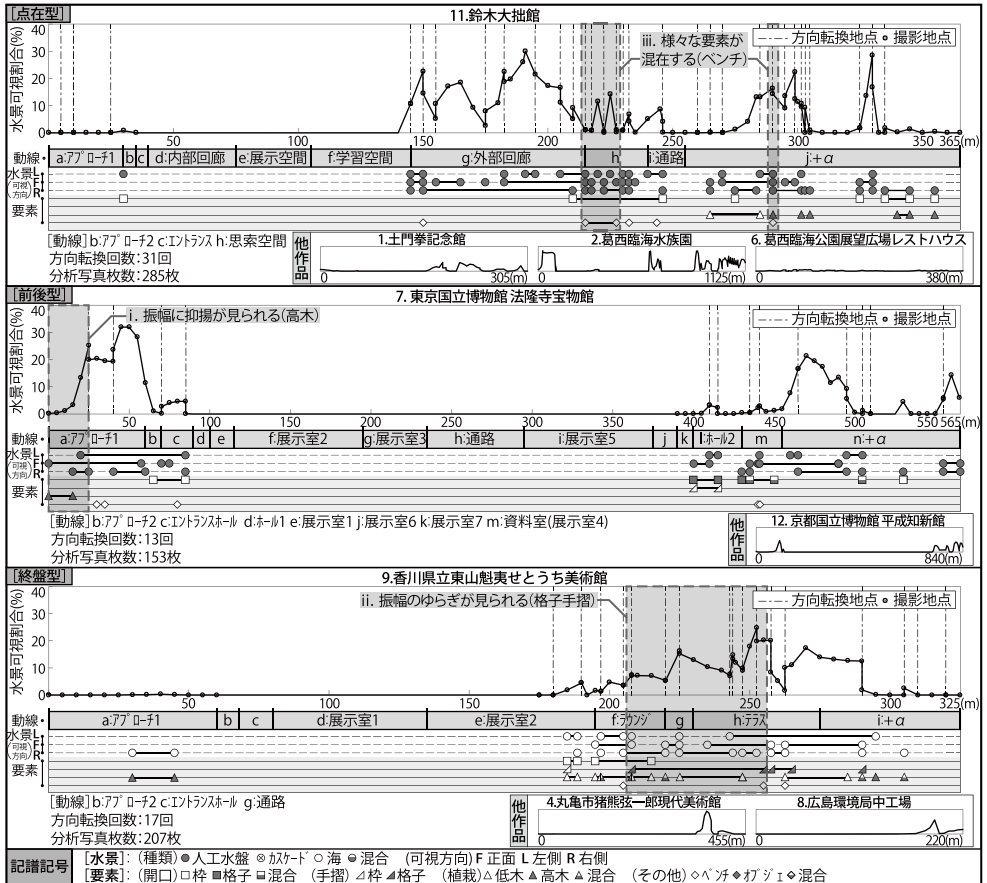


図7 3種類のノーテーション

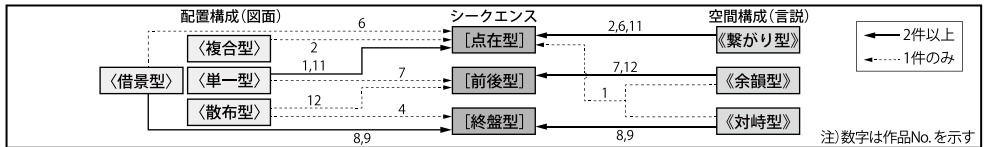


図8 各類型の関係

つくっていると考えられる。また、空間構成とシークエンスの関係を見ると《繋がり型》は[点在型]のシークエンスをもち、方向転換によって水景を多くの視点から繰り返し見せる操作をしていると考えられる。《対峙型》は[終盤型]のシークエンスをもつ傾向にあり、水景を展示鑑賞後に初めて見せる操作をしていると考えられる。《余韻型》は[前後型]のシークエンスをもつ傾向にあり、展示鑑賞前と後の二度において水景を見せる操作をしていると考えられる。

### 【6】まとめ

本研究から、谷口作品における空間性をノーテーションによって可視化し詳細に把握できた。その結果、水景の配置と動線の工夫、水景の見せ方にゆらぎや抑揚をつける操作によってシークエンスを多様なものとする谷口の設計手法が明らかになった。また、建築空間における『水』の役割とその可能性について理解を深めるものとなった。

【注】 1) 本研究における水景とは、人工水盤や海などの水辺の眺望を指す。 2) シークエンスとは、視点の移動に伴い連続的に変化する景観を指す。(彰国社建築大辞典第2版, p. 669) 3) 本研究における外部隣接空間とは、建物に隣接するアプローチ空間やテラスなどを指し、建物から離れた遊歩道などは除く。 4) 2018年8月10日～2018年10月2日の期間に見学可能であった作品。 5) ノーテーションとは、シークエンシャルな空間体験を記述するために使われる記号法を指す。(彰国社 建築大辞典第2版, p. 1291) 6) 本研究における人工水景とは、谷口設計または他者と共同設計の人工水盤・人工池・カスケードを指す。 7) 『新建築』(新建築社, 1983. 12-2014. 12) 他 8) 方向転換地点は5mに関わらずプロットする。また、開口無し、開口から水景が取り入れられてない、写真撮影禁止のエリアにおいてはプロットをしない。 9) 一眼レフカメラと三脚を使用して、レンズ焦点28mm(35mm換算)の条件下で撮影。